

平成 29 年度岩手県釜石保健所運営協議会議事録

1 開催日時

平成 30 年 2 月 21 日（水） 午後 6 時～午後 7 時 40 分

2 開催場所

釜石市新町 6 番 50 号

釜石地区合同庁舎 4 階大会議室

3 出席者

(1) 委員（50 音順）

植松 美行 委員

及川 佳則 委員

小山 賢 委員

金澤 英樹 委員

川上 幹夫 委員

菊地 秀明 委員

工藤 英明 委員

小泉 嘉明 委員（副会長）

坂下 伸夫 委員

佐々木 ひろ子 委員

高澤 和子 委員

寺田 尚弘 委員

土肥 守 委員

檜崎 信子 委員

野田 武則 委員（会長 議長）

平野 公三 委員

(2) 事務局

平賀 瑞雄 所長

岩井 賀寿彦 次長

大芦 洋悦 主幹兼福祉課長

山内 健幸 企画管理課長

小本 和恵 保健課長

佐藤 敦 環境衛生課長

4 開会（会議成立報告）

委員 19 名中 16 名の出席

5 あいさつ

平賀釜石保健所長

6 会長及び副会長の選出について

保健所運営協議会条例第 4 条第 1 項の規定により、会長に野田武則委員（釜石市長）、副会長に小泉嘉明委員（釜石医師会長）を選出した。

また、同条例第 4 条第 2 項の規定により、議長に野田武則会長（釜石市長）を選出した。

7 議事

（1）報告事項

次の事項について、事務局から報告を行った。

ア 次期岩手県保健医療計画の地域編（釜石保健医療圏）の策定について

イ 被災者を対象とした健康づくりの取組について

ウ 動物愛護事業の推進について

【質疑、意見等】

野田会長（釜石市長）

保健医療計画の件ですが、県立釜石病院はそろそろ耐用年数が来ているはず。

確か震災後の平成 24 年に耐震工事を含めて整備していただいた訳ですが、それでもそろそろ次の展開を考えなければならない時期だと思ひまして、保健医療計画の中に盛り込まなければならないのではないかと思ひ、市としても要望していた訳ですが、その点についてどのようにお考えなのか、あるいは計画の中でどのように議論されているのかお伺いしたい。

釜石保健所 山内課長

この保健医療計画を検討してきた 3 回ほどの会議の中でもお話しが生まれて、私どもの方でも確認をさせていただくということにしたところでした。

その後、県本庁に、釜石保健医療圏域としては従前の計画に引き続き地域編に掲載したい旨主張させていただいたのですが、県本庁からは、地域編の書きぶりとしては全圏域において重点課題に対する課題と取組みの記載で統一することとしているので、一圏域の部分でそれ以上の記載は想定していないとの回答でありました。

これについては、医療局の経営にも多大に影響してくる部分ということで、県本庁から医療局には伝えてあるという話であったことから、記載は難しいということで市にもお伝えしたところです。

野田会長（釜石市長）

現実問題として、（耐用年数は）工事をしたときから計算すると平成 40 年になりますね。

今、平成 30 年ですから後 10 年しかないということになりました。

10 年はあっという間ですので、今から準備もしていかなければなりませんし、土地の確保を進める必要もありますので、その辺については是非とも医療局にも強くお願いし、別途、市としても要望活動を展開していきますけれども、地域の皆さんで不安になられる方も多いものですからご配慮をお願いします。

（2）協議事項

次の事項について、事務局から説明を行い、いずれも了承された。

- ア 地域医療等の確保・充実について
- イ 脳卒中予防対策の推進について

【質疑、意見等】

小泉委員（釜石医師会長）

私たちは NPO を立上げまして、皆様からのご協力を得てやっているわけですが、医療に関してはカードを皆さんに発行し、間もなく 5 千、6 千にはなっていくと思います。希望的なことを申せば、各病院の横の繋がりが出来るようになりたいということを念頭に置きながら進めていきたい。この事業は震災前から進めていた事業なので、今更焦ることなくゆっくり確実に進めていきたい。

市長さんは県立釜石病院について心配されているようですが、これは震災前には県立釜石病院は次だと言われていたものが、震災により県立大槌病院や県立高田病院が流されるといったことがあったため、話題に上がらなくなったもの。医療局は次に直すのは県立釜石病院だとは知っているが、震災で何も無くなったところから順に直している状況。実は予算は違うのですが、そちらに予算をまわしているため話が無くなった。これは釜石市さんと一緒に皆でバックアップしながら常に要望していると（医療局は）また思い出しますから。（医療局は）直す予定は暫くありませんとは言っているが、直さないとは言っていない。本来はあそこで県立釜石病院の耐震工事をしなければすぐに直さなければいけない状況でした。予算が付いたため OK はまゆりネットや新しい救急車等と一緒に直したもの。ガン拠点病院になるときもそのとおりでした。リニアックが何故入らないのかと医療局長にあの時も言いました。皆が常に言っていないと忘れられてしまいます。

地域包括ケアの方は少しずつでも進めているので良いのかなと思っています。健康な老人を作らないと。釜石は高齢化率が 40% になろうとしています。日本もこれから 20 年後には必ずなりますから。釜石はその時には、多分、一番強い町になるはずなんです。高齢化率 40% になったら東京は潰れますから。今が 20% 位ですから倍に

なるなんて考えられないですよ。人が減って、65 歳以上が 40%になる時に日本がどういうふうに生きているかが問題であって、そこで私たちが頑張っていることに価値があります。

川上委員（県立釜石病院長）

人事は早く変わるもので、院長になった 4 年間で今が 3 人目の医療局長です。新任の挨拶に来られた際は、いつも県立中央病院の前のうちを新しくしてくださいねと言っているが、やはり色々ある。震災問題が一番大きいのでしょうか。具体的に話をすると新病院を造るのであれば、造ってそこに移るということ。では、造る場所はあるのかという話になり、その辺が最初のネックになる。造りながらその場で診療というのは無理ですから。

ただし、40 年前の建物ですから、時代的な手術室になっている。外はいくら綺麗にしても造りは古いものになっている。その中で良い麻酔科の先生がいるので、文句一つ無く手術をこなしてくれている。その彼は救命救急士さんへの指導も非常に熱心で助かっている。今の若い麻酔科の先生が来たら、ここでは麻酔をかけられないと言うかもしれない。もちろん配管関係もそうですね。管というのは詰まっていつか破裂するか詰まるかで、その辺が老朽化しているのは明らかなので。忘れないように他の病院の建て替えの話がある時には、ちょっと待てよという話はしていかなければいけないのかなと思います。平成 7 年に補修、12 年には新病棟を造り、震災の時には耐震工事をしているので、全然手がついていないということではないが、構造的には古い建物になっている。

OK はまゆりネットに関しては、現在、48 千人のうちキーコードを持っているのが 8%位になる。子供さん方を入れての 48 千人なので、かなりの方が持っていて、患者さん方の同意を得たうえでデータを公開しましょうということを行っていて、これは今までどおり続けていくということですがけれども、保健所の皆さんが一生懸命で、非常に協力的にやってもらっていることに、私自身は感謝しています。

坂下委員（県立大槌病院長）

資料に地域包括ケアシステムの図がありますが、釜石は釜石、大槌は大槌でこういうシステムを作っていかなければならないと思う。この地域の医療の中心は県立釜石病院ですけれども、我々大槌病院もそういう役割も担っていかなければならないと思いました。

また、弱いのは自宅の介護力。自宅の介護が難しくなっている。介護施設、介護サービスは大槌町が弱くなっていますね。そういうところを保健所の方々と連携し、ある物を有効活用して、もっと必要なら知恵を出し合って 2025 年に向けて協力していければいいかなと思いました。

野田会長（釜石市長）

釜石に八つの応援センターを作りまして、地区ごとにこういった取り組みをしておりますが、なかなか市民の皆さんの期待に応えられるまでには至っておりません。

大槌町さんとは定住自立圏構想で一層連携を深めるということでございまして、医療とか介護でも連携を深めていきたいと話しているところです。

土肥委員（国立病院機構釜石病院長）

釜石が脳卒中ワースト1位になったモチベーションもあるのかもしれませんが、保健所の皆さんは最近、レベルが凄いですよね。DVDとかイベントとか凄くて感動しています。

人間がなんで脳卒中になるかという、遺伝子のタガが外れていて、この体重だったらもう少し脳味噌が小さいのが普通なんです。例えば牛はもっと体が大きいんですけど人間の脳味噌よりも小さいわけですよね。体重比率からすると脳の比率が異様に大きいのが人間なんです。もともと小さい脳味噌用の血管しかなかったところに脳味噌だけが大きくなってしまった。脳には血流量が沢山必要なので、団地に1万人住んでいるのに1車線の道が2本しか無く、道路が早く傷むような状態。ところがアメニティが良くなり皆長生きするようになって、70代、80代まで普通に生きられるようになった。そうすると負荷がかかったまま80代になるので、切れるか詰まるのは当たり前。そこで高血圧とかになれば、スピードを出し過ぎたり、過積載で道路を走ると道路が早く傷むのと同じ。

子供の頃から塩分を減らす食生活を。小学校では手遅れで、保育園や幼稚園から。もしかしたらお母さんが妊娠している辺りからやらなくてはいけないのかもしれない。

あと、被災地ということで、独居で色々なサポートを受けられなくなった人が孤立して、カップラーメンばかり食べていたり。

この前、ためしてガッテンで赤味噌を使うと結構減塩になると言っていました。美味しくて塩分の少ない食べ物で誘導した方が良いのではないのでしょうか。

釜石保健所 小本課長

只今、土肥先生からの子供の頃からという話はそのとおりでして、先日の減塩リーダー研修会には学校給食センターの栄養士さんや調理師さんにも参加いただきましたので、学校給食センターでも少し工夫して取り組んでいただければ、子供たちにも減塩の食べ物を味わってもらえると思います。

やがてそれが減塩の味になれることになると思いますので、学校にも広めていければなと思っています。

佐々木委員（食生活改善推進員団体連絡協議会釜石支部長）

私達は、脳卒中ワースト1からの脱却を目指し、行政と連携しながら減塩活動に取り組んで参りました。

1月から3月までは市の減塩強化月間になっており、それに伴い、住民の減塩アン

ケート調査を行っているところです。

健康のためには減塩した方が良いということは知っています。しかし、食べ物の味の好みは長い間の食生活によって培われるもので、味の好みは急に変えられない。また、美味しくないのでやりたくないなど、薄味は美味しくないというイメージが強く、ついつい食べ慣れてきた味になってしまうのではないかと思います。

汁物は減塩傾向にあります。それ以外の地元の塩辛い加工食品などの摂取量も多く「減塩していますよ」ではなく、実は減塩したつもりになっている人が多いのではないのでしょうか。

薄味を補う食品である香味野菜、香辛料、酸味、コクや旨味から味が濃くなる牛乳をプラスして塩分を減らすなど、活動の中で色々普及啓発はしているもののどれくらい実践している人がいるのか少々疑問ですが、これは子供から壮年高齢者までの大きな健康課題だと思います。住民の健康に対する意識改革、そして健康な食生活を実践しやすい環境づくりが必要だと感じています。

野田会長（釜石市長）

啓発運動は市も協力しますし、DVD をケーブルテレビで放送したいという話もありましたけれど、是非一緒にやっていきたいと思います。今、消防のほうでは救急車の適正な使い方の啓発番組を作ってケーブルテレビで流す予定です。年度毎に色々なテーマを持って啓発を進めたいと思っていますので、よろしくお願いします。